〔板橋区教育委員会教育長賞〕

「税とは助け合いの証」

赤塚第三中学校３年

椎　橋　遥　斗

「税は私たちの生活になくてはならないものだ」私がそう思うようになったのは、夏休み前に受けた租税教室で、自分が今までどのような税金による恩恵を受けて来たかを考えてみてからだ。

私は二〇〇八年一月二十一日、東京大学医学部附属病院で生まれた。生まれる前から「ファロー四徴症」という先天性心臓病の一種を患っていた。そのため生まれてすぐに入院し、体の中に人工管を入れる手術を受けた。七・八時間にのぼった二度の手術は成功、無事退院できた。その後、人工管を取り替える手術や人工弁を入れる手術も成功し、今では日々の薬も飲まずに経過観察の段階に入っている。だが、入院・手術三回と経過観察中の通院にかかった費用は本来何千万円もかかったとのことだが、実際はそのうちの入院時の部屋代・食事代・交通費など、数万円ぐらいだったと聞いた。ならば、残りのお金は誰が支払ってくれたのだろうか。その話を聞いた当時の私はとても疑問に思った。

だが、中学生になり税金について学んだことによって、その謎が解けた。「小児慢性特定疾病医療制度」この医療費助成制度によって都が医療費の大部分を支払ってくれたおかげで、我が家はその一部しか払わなくて済んだのだ。そして、都が私の代わりに支払ったときに使ったお金こそが、自分たちが消費税だ住民税だと言って国や地方自治体に払ったお金「税金」だったのだ。それすなわち国民全員が少しずつ分け合って私の医療費を払ってくれたということになる。この事を知り、私は税というシステムのありがたさを深く感じた。税による医療費助成によって手術が受けられ、生きることができたということは、裏を返せば税金が無ければ手術を受けられず、死んでしまっていたかもしれないということだ。つまり、税金という制度があったから今生きているということになる。そう気付かされた。

税金による日々の生活への恩恵はそれだけではない。ゴミ収集や警察、消防など生活に必要なサービス、道路整備などの交通、学校の設備や教材などの教育、上下水道の整備などの衛生など多岐にわたる。最近の政治家は消費税減税を公約にかかげている人が多い印象を受けるが、国の収入の約二十パーセントを占める消費税を減らして国民にメリットは残るのかと疑問に思った。今はまだできなくても、大人になったら税の使い道をよく考えて政治家を選びたい。また、人一倍税金のお世話になった身として、しっかり税を納めて病気に苦しむ子どもたちを助けられるようになりたい。